

遺族へのビリーブメント・ライフレビューの有効性に関する研究

聖マリア学院大学 教授
安藤 満代

この度は助成をいただき、またこのように発表の機会をいただき、心よりファイザーヘルスリサーチ振興財団の方々にお礼を申し上げます。

【スライド-1】

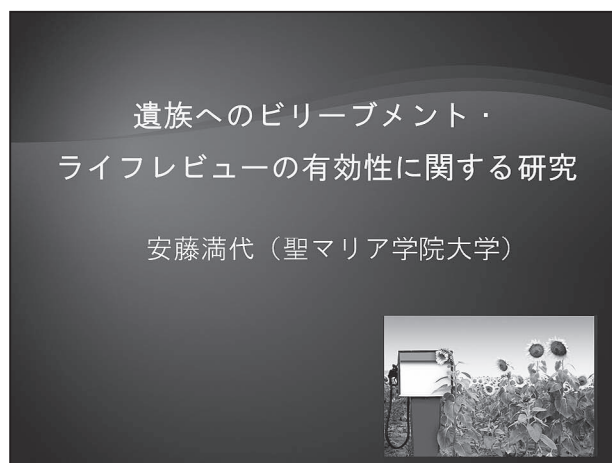
私の題は「遺族へのビリーブメント・ライフレビューの有効性に関する研究」ということで、ご遺族に対するケアについて発表させていただきます。

【スライド-2】

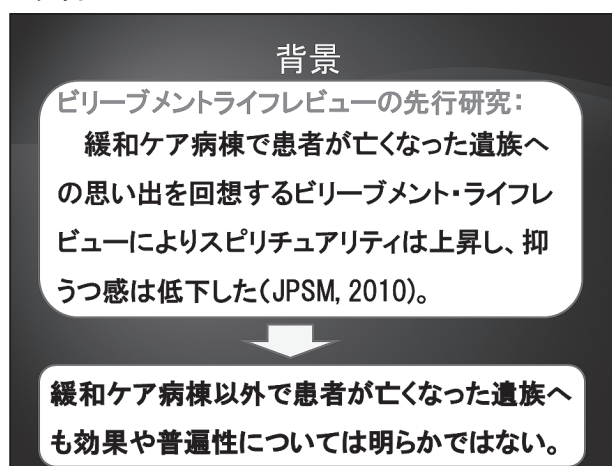
まず背景ですが、ビリーブメント・ライフレビューの「ビリーブメント」というのは死別とか、日本では悲嘆という言葉を使うことが多いのですが、死別も悲嘆も含めてビリーブメントと海外では使われることもありますので、今回そのように使いました。

緩和ケア病棟で患者さんが亡くなった遺族に対しての思い出を語る、昔話をする、どのような方であったのか、というようなビリーブメント・ライフレビューというものを使うと、スピリチュアリティ（この定義は色々ありますが、人生の意味感とか生きていく目的感とかです）が上昇して抑うつ感は低下するという私どもの先行研究があります。しかし、これは緩和ケアの病棟という特別なケアをしているところですので、そうではないところでも、患者さんが亡くなったときにこのビリーブメント・ライフレビューは効果があるのだろうか。その遺族に対する効果とか普遍性について明らかでなかったので、この点を調べていこうと思いました。

スライド-1



スライド-2



【スライド-3】

今回の目的ですが、ビリーブメント・ライフレビューは、緩和ケア病棟以外で患者さんが亡くなった遺族の抑うつ感とか不安感、Spiritual Well-being（「心の安寧」と訳すこともあります）に効果があるのかということについて調べました。

もう一つは、死を通しての遺族の心理的变化、今後大切にしたいこと、そして希望はどのようなものだろうか、ということについて調べることになりました。

【スライド-4】

方法です。

ある地域での遺族会に参加している方のうち、同意が得られた方20名を対象にしました。平均年齢は68歳で、ちょうど男性と女性の割合が同じ(50%:50%)になるようにしています。患者さんとの関係は、そのほとんどの90%の方が配偶者でした。そして子供だという方が10%です。死別後どのくらいの期間が経ったかということと22か月で、2年に満たないところでした。

【スライド-5】

手続きは、最初の面接でビリーブメント・ライフレビューという昔話をするものなのですが、いくつかの質問項目を用意しておきます。故人との思い出話とか、故人が亡くなった後のご自分の変化とか、今後の希望とかをお尋ねして、内容を録音させていただきました。その録音を基

にして、簡単な患者さんの思い出になるようなアルバムをこちらで作成し、約2週間後の2回目の面接で、ご遺族とセラピストの方がアルバムを見ながら内容を確認していき、最初と最後にアセスメントための質問紙に回答して頂きました。

スライド-3

目的

1. ビリーブメント・ライフレビューは、緩和ケア病棟以外で患者が亡くなった遺族の抑うつ・不安、Spiritual Well-beingに効果があるのか？
2. 死を通しての遺族の心理的变化、今後大切にしたいこと、希望はどのようなものか？

スライド-4

方法(1)

対象:ある地域での遺族会に参加している方のうち同意が得られた方20名を対象とした。

項目	N	%
参加者平均年齢	68 years	
性別		
男性	n=10	50 %
女性	n=10	50 %
患者との関係		
配偶者	18	90
子ども	2	10
患者死後年月	22 九月	

スライド-5

方法 (2)

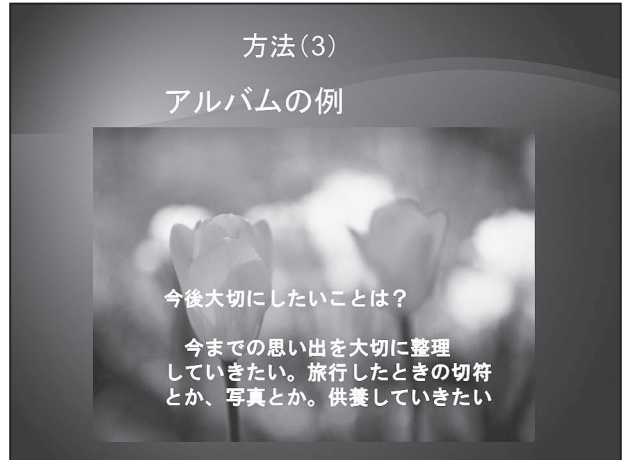
手続き :

- 1回目の面接において遺族は質問項目によって、回想した。質問項目は、「故人との思い出」、「故人が亡くなった後の自分の変化」、「今後の希望」などであった。内容を録音した。
- ↓
- 面接者は録音記録をもとにアルバムを作成した。
- ↓
- 第2回目の面接では、遺族とセラピストはアルバムを見ながら内容を確認していった。
- ↓
- 1回目の前と2回目の後に、質問紙に回答した。

【スライド-6】

例えば、アルバムの例としては、「今後のご自分の人生でどういうことを大切にしたいですか」というようなことをお尋ねしたときには、「これまでの思い出を大切に整理していきたい。旅行していた時の切符とか写真とか。それぞれ供養していきたい」というようなインタビューの内容などをまとめていくという手法でした。

スライド-6



【スライド-7】

結果です。

不安とか抑うつ感のうち、ここでは抑うつ感のみですが、抑うつ感を測るものにはBDI (Beck Depression Scale) を使いました。そしてスピリチュアリティを測る時には、ここに書いてありますFACIT-Spという質問紙を使いました。

スライド-7

結果(1)

抑うつ感の測定: Beck Depression Scale II (BDI)
スピリチュアリティ: Functional Assessment Chronic Illness Therapy - Spiritual Well-being (FACIT-Sp)

尺度	介入前	介入後	t	P値
BDI	14.4±9.2	11.6±7.4	2.1	0.045
FACIT-Sp	24.3±10.1	25.9±11.1	-1.0	0.34

・BDIの得点は、有意に低下した……抑うつ感への効果があった
・FACIT-Spの得点は有意差なし……スピリチュアリティへの有意な効果はみらなかった

その結果ですが、抑うつ感のBDIは介入の前が14.4であったのに介入後には下がり、これについては有意差がありました。一方、スピリチュアリティは24点から上昇したものの有意差はなかったというところから抑うつ感への効果はあったということですが、FACIT-Spのスピリチュアリティのほうについては、有意な効果は見られなかったこととなります。

スライド-8

結果(2)

	BDI			FACIT-Sp		
	男性	女性	p	男性	女性	p
前	9.3±8.9	19.5±6.6	0.02	29.1±11.3	19.5±6.2	0.59
後	7.2±5.9	16.0±6.2	0.02	29.8±11.1	21.9±10.0	0.21

・BDIの得点は男性より女性がたかった。
・女性の方が抑うつ感が高かった。

・FACIT-Spの得点は、男性の方が女性より高かった。
・男性の方がスピリチュアリティが高かった。

【スライド-8】

男女差は、BDIの抑うつ感、「介入前」は男性が9.3であるのに対して女性は19点と有意に高かった。そしてまた「介入後」では男性ももちろん下がりますし女性も下がるのですが、男女差では女性のほうが抑うつ感が高いという結果でした。

もう一方のスピリチュアリティは、「介入前」は男性が29点と高く女性のほうが低い。「介

入後」になっても女性は上昇はするのですが、男女差はありました。つまり FACIT-Sp は男性のほうが女性よりも高くスピリチュアリティが高いということで、男性のほうがイキイキとしていたという結果になっています。

【スライド-9】

「患者さんの死後から遺族が変わったことはどういうことですか」ということで、それぞれ質的分析をしたのですが、これらのいくつかのサブカテゴリをまとめていってカテゴリとしていきました。

男性の方では「家事を負担しないといけなくなった」とか「1人で生活することの認識」ということで、ご自分で「新たな家族役割をしないといけない」という追加があった。あるいは「故人に感謝をする」とか「自己変化の肯定的認知」ということで、「癒しの過程」でありますけれども、「自己の成長」というものが見られていました。そして「自己の健康への配慮」や「自己の死の認識」（自分もいつかは死ぬのだということを認識した）、「喪失感の理解」ということで、「故人の死からの学び」ということでした。これらのことについては海外の文献とも共通するように、死後についてはこのようなことを遺族の方は語られることが多いようでした。

一方、日本で特徴的であったのは、「両親が揃って子どもたちを育てていきかかった」とか「周囲のサポートの授受」とかの「社会や周囲との関係性」というようなものを、色々と言われているようでした。

スライド-9

結果 (3) 患者の死後から遺族が変わったこと

カテゴリ	サブカテゴリ
・新たな家族役割の追加	家事の負担 一人で生活することの認識
・癒しの過程と自己の成長	変化への努力 故人への感謝 自己変化の肯定的認知 自己の健康への配慮
・故人の死からの学び (海外と共通のようだ)	自己の死の認識 喪失感の理解 他者への優しさ
・社会や周囲との関係性 (海外では少ないようだ)	片親となった自覚 周囲のサポートの授受 日常での死の話題 遺品整理への思い 喪の慣習

【スライド-10】

そして、「遺族がこれから大切にしていきたいこと、あるいは希望というのはどういうことですか」と尋ねたときに、「天国で再会をする」とか「遺品を整理していきたい」とかで、「喪の作業をする」。また、「今後自分も悔いなく生きていきたい」ということで、「生きていく指針を持つ」。あるいは、「自分で自分の子どもをこれから育てていく」、「供養する」というような「自己の役割の達成」とか、「家族を大切にする」というような「良好な人間関係」、あるいは「自分自身が人生を楽しんでいく」というようなことも言われていました。

スライド-10

結果 (4) 遺族が今後大切にしたいこと、希望

カテゴリ	サブカテゴリ
・喪の作業をする	悲嘆 天国での再会に向けて 遺品の整理
・生きていく指針をもつこと	健康でいること 悔いなく生きること 子どもに迷惑かけないこと 自立して生きること 希望をもつこと
・自己の役割の達成	子育てを達成すること 供養すること
・良好な人間関係の保持	家族関係を大切にする 仲間関係を大切にする 他者の役に立つこと
・人生を楽しむこと	旅行や外出を楽しむ

故人との愛着が関係している？

【スライド-11】

考察です。

これらから、ビリーブメント・ライフレビューは抑うつ感の改善には効果はあるだろうということです。女性は男性よりも抑うつ感が高く、男性は女性よりもスピリチュアリティが高いという性差が見られました。今回、遺族会ということだったので、遺族会に求めて来られているものが、若干異なっていることが反映されているかもしれません。

【スライド-12】

患者の死後について海外と比較した場合、日本では社会とか周囲との関係性が違って、文化差があるかもしれないことが示唆されました。

また、大切にしたいこと、希望については、故人と遺族との愛着関係の距離が影響している可能性も考えられました。

【スライド-13】

結論はスライドをご参照ください。

スライド-13

◆ 結論

- 1)ビリーブメント・ライフレビューは、遺族への抑うつ感の改善に効果がある。
- 2)スピリチュアリティについては、ベースラインの高さが影響するかもしれない。
- 3)ビリーブメントライフレビューは、遺族が喪失の体験のなかからも肯定的な部分を見つけることに貢献できる可能性がある。

スライド-11

考察(1)

患者が緩和ケア病棟以外で亡くなった遺族に対しても、抑うつ感の改善に効果があることが示され、普遍性が示唆された。

女性は男性よりも抑うつ感が高く、男性は女性よりもスピリチュアリティが高いという性差がみられたのは、対象者が遺族会の参加者であったため、遺族会に求めるものが異なることを反映しているかもしれない。

スライド-12

考察(2)

患者の死後に変わったことについては、海外の研究結果と比較して、日本では「社会や周囲との関係性」は異なっており、文化差があることが示唆された。

「大切にしたいこと、希望」は、故人と遺族との愛着関係の距離が影響している可能性が示唆された。

スライド-14

ご静聴ありがとうございました。



質疑応答

- 会場：** 2年前に父を亡くした経験からは、担当医師が母に投げかけた言葉を始め、社会の遺された家族に対する対応が十分なものとは思われません。死をタブーとする社会、「遺族」という言葉も含めて考え直すことが重要だと思います。
- 座長：** スライド-12で「社会や周囲との関係性」が、日本と外国と非常に文化差があって違うとおっしゃいました。文化の差と言われてしまうと漠然としているのですが、例えば、元々外国人というのは家族間の関係が希薄だとか、情が薄いとか、個人主義優先とか、そういうことなのでしょうか。
- 安藤：** 日本で個々に語られた方達というのは、夫が亡くなって自分一人で子どもを今から育てていかなければならないということで、やはり自分は何か社会から取り残されたような、何か社会の目を気にするというようなところで…
- 座長：** それが日本の特徴だというわけですね。外国は少なかったということですか。
- 安藤：** あまりそういうのは見られなかったということです。